

辺野古の基地建設計画は、1996年のSACO(沖縄に関する特別行動委員会)最終報告の中で、沖縄宜野湾市にある普天間基地を返還する代わりに代替基地として建設計画が持ち上がりました。現在は、事実上の基地建設着工である「ボーリング調査」が日本政府、那覇防衛施設局によって進められようとしており、それを止めるために、住民による座り込みと海上での阻止行動が連日のように繰り返されています。



署名提出

1月20日、沖縄・辺野古沖でのボーリング調査の即時中止と、基地建設計画の白紙撤回を求める2700筆の署名を大阪防衛施設局に提出しました。



街頭アピール

署名提出行動当日には、35名の方の参加がありました。行動終了後には街頭に出て、キャンドルアピールを行いました。



差し止め訴訟

12月27日、ボーリング調査に反対する市民や近隣海域の海人ら68人が原告となり、国を相手にボーリング調査の差し止めを求める訴えを那覇地裁に起こしました。

本当の意味での辺野古・基地建設の「白紙撤回」を!

現在、辺野古では、住民と近隣海域の漁民たちが一体となった阻止行動によって、那覇防衛施設局が2004年度中に終えるはずであった63カ所のボーリング(掘削)調査を、ただの一度も行えないでいるという状況をつくりだしています。このような中、日米合意された普天間基地の辺野古移設を、米軍再編の中で再検討する兆しが広がり、日米両政府から「辺野古移設見直し」を示唆する発言が相次いでいます。しかし、在日米軍再編の真の目的が、声高々に言われている「沖縄の負担軽減」というものではなく、沖縄、そして日本全体の米軍基地の強化であるということを見落としてはならないと思います。現に、辺野古の代替案として検討されているのは、沖縄を中心とした既存の空港・米軍基地に機能を移転させるものだといわれています。

また、「辺野古移設見直し」が取り沙汰されている中でも辺野古では緊迫した闘いが続いています。3月16日

には、まともな施設局がスパット台船(水深4m以上25m未満の海底を掘削するための巨大な台船)を海底に設置しようとし、住民たちの必死の阻止行動によって追いつかれるという事件がありました。今回、施設局は自らが作った協議書の「日の出から1時間程度後から作業の開始」というルールに反して早朝に作業を行うという暴挙に出ました。そして、施設局は、ボーリング調査を4月以降も継続するため、海域の使用延長手続きに着手しました。このように、辺野古現地では、決して手を緩めることができない緊迫した闘いが今後も続いていくことになります。辺野古の頑張りを決して孤立させることなく、「辺野古移設見直し」が基地のたらい回しにならないよう、日本全体から声をあげるときが、今まさにきています。私たちは、本当の意味での辺野古基地建設の「白紙撤回」に向けてさらに行動を起こしていかなければなりません。共に声をあげてください。



スパット台船

スパット台船を積んだクレーン船と、その航行を止めようとする度に前に割って入る小型船。ついには、クレーンでスパット台船を吊り上げ、降ろそうとしている場所に陣取り、スパット台船を設置させなかった。



海人

辺野古の海を守るために駆けつけている国頭、東、金武、宜野座、石川の海人たち。

●那覇

サイレント

毎週土曜日の夕方には「サイレントキャンドル」と銘打って、キャンプ・シュワブの米兵たちに「辺野古の海とジュゴンを守ろう」と静かに訴える行動が行われています。



作業船

施設局がチャーターしている漁船。操船する漁民、施設局員、作業員が乗っています。

